

アイドルのハーレムなんてありえない

おるとろす

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ずっと書きたかったネタを深夜のテンションで書いた。

深夜のテンションだから文章がめちやくちやなのも仕方ないね！

目次

第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
35	28	20	10	1

第1話

「と、いうわけで、くれぐれも頼むよ」

「大丈夫ですよ社長。そんなんありえないですから」

目の前のおっさん、もとい社長が言う。何か疲れてるように見えるのは気のせいだろうか。

今朝発刊の雑誌で某有名アイドルの熱愛がすっぱぬかれた。それも相手は担当マネージャーの様で、なんとそのマネージャーは他の複数のアイドルとも関係を持っていたらしい。

その為社長は俺に注意喚起していた訳だが……。

俺も多数のアイドルを受け持っているが、断言しよう。俺のアイドルに限ってそれはない。複数人はおろか一人だつて付き合うことはできないだろう。

だつて俺ただのプロデューサーだよ？

天と地、月とすっぱん。

アイドルと恋愛とか、どこのエロゲだよ。買うから教えてくれ。

はあ………家帰つてエロゲでもしよ。

—————

「……それで、私と、付き合つて欲しいんだ」

「うん。確かに………つて、なんて？」

「だから、私と付き合つて欲しい」
待ってくれ。

えっ、ちよ、これなに？ どつきりなの？

もしここで俺が「はい」つて答えたら、プラカード持った社長が裏から出てきて解雇通告すんの？

いや、待て落ち着け俺。冷静になろう。

目の前にいる少女、渋谷凜は赤面しながらも、俺の目を真っ直ぐ見つめる。

と、とりあえず確認しようか。雰囲気から察するにまずないだろう

が、万が一がある。

「えっと、それは買い物に、とか映画に一緒に行くって意味の付き合うかな？」

「えっと、まあ、そうかな」

失敗した。この質問じゃ駄目じゃん。意味がない。どっちだよ。どっちの付き合うだよ。連れそうって意味？ それとも交際するって意味？

「な、なんだよー。ははっ、改めて言わなくても、僕ならそれ位いつだって付き合うのに」

「ちよつと、真剣な話してるんだから、茶化さないでよ」

「や、やだなー。しぶりんおこりん？」

「……………」

「……………ごめん」

某ネズミの声真似をしたらキツと睨まれた。

え、なにこれ。がちなの？ 取りあえず目をきりつてしとけば誤魔化せるかな。

「それで、その。返事は別に今じゃなくてもいいから。そのプロデューサーも忙しいし、考える時間も必要だと思うから」

いやいやいやいやいや。

まてまてまてまてまて。

ないだろ。いや、ないだろ。担当アイドルと恋愛なんて駄目ですよ。

バレたら速攻首になるわ。てかファンに殺されるわ。

大体凜まだ十六でしょ。もし付き合ったらロリコン認定確定じゃない。俺の社会的地位が失墜するじゃねえか。

いや、そもそも首になった段階で地位も何もないけども。

とりあえず、俺は凜を適当に誤魔化して場を離れた。

—————

いや、ないよな。ありえないよな。

確かに凜は可愛いし性格も良いし、何かバレンタインで恥じらいながらチョコ渡してきたときはときめき過ぎて死にそうになったけど。あれ？ ありなのでは？ 凜良くね？ 全然いいじゃん。めっちゃくちやありだよ。

いや、待て。落ち着け俺。

凜と付き合うイコール、ロリコン無職だぞ。

無職はきついだろ。凜だって無職の男と付き合いたいはずがない。それに俺はこの職業に誇りを持つてる。就活失敗した俺を社長が『ティン』とかいう意味不明な理由で拾ってくれた。経緯はどうあれ、今では仕事もなれ、やりがいだって感じてる。

よし、それならば断ろう。

それがいい。それが一番健全だ。そもそも未成年に手を出すのはギルティだよな。

「ねえ、なんか一人で変顔大会してるところ悪いんだけど」

「真顔のつもりですけど?!」

「あつ、そうだったんだ。いやー、ごめんなさい」

あつ、そうだった。休憩室に逃げ込んだら、加蓮と鉢合わせしたんだっけ。

「どうした？ もうその雑誌読み終わったのか？」

「えっ、うん。まあね」

なんだろう。この空気。なんか俺の第六感が危険を訴えてる。今すぐこの部屋から出るって言ってる。

こんなに激しく危険を訴えるのは、芳野のせんべいを見た目そっくりなワツフルにすり替えた時以来だ。

「……プロデューサーさんと出会ってから、色々あったよね。体力がなくて初めはルキとれさんのレッスンスラについていけなかった私を、沢山励ましてくれたよね」

あつ……………やばそう。

「……(中略)それで、私気付いたんだ。私にはプロデューサーが必要だって。それは別にアイドルの事だけじゃなくて、うん。……プライ

ベート、でも。その、さ。プロデューサーさんが良ければ、私と付き合ってくれないかな」

うわ、凜の時よりも更に重く告白されたんだが……。もし俺が某ラノベ主人公なら伝家の宝刀『えっ、なんだって?』を使えるのに。でも言えねえ。こんな状況で言えるわけねえ。

「……………考えさせてくれ。5年くらい」

「え、なんだって?」

「……………お前が言うんかい (超小声)」

お前が言うんかい!

「それで、その、返事はさ。プロデューサーさんが都合の良い時にしてくれればいいから。別に今じゃなくても。ずっと、待ってるから」

「あ、ありがとう」

おかしい。アイドルから告白されるのって嬉しいはずだよな。なんでこう、心臓がきゅって縛られるみたいに痛むの?

別にときめいてるとかそういうことじゃないよ。

加蓮はまたテーブルの雑誌を読み始めた。いや顔真っ赤だし、全然ページ動いてないし。なんだ、この甘酸っぱい空間は!

—————

戦略的撤退をしよう。

取り敢えずトイレに立ち寄ってから家に帰ることにする。んでもって家で熱いシャワーを浴びて眠ろう。

もしかしたら、これ夢かもしれないし。夢なら……………いいなあ……………。

トイレの前な廊下。なんか見知った顔がそこに立ってた。おう、今お前のメンバーの所為で俺大変なんだけど。

「奈緒か……………チェンジで」

「チェンジってなんだよっ。悪かったな、あたしで」

なお が とびだして きた。

奈緒を見るとつい脊髄反射的に弄ってしまふ。因みに早苗さんに同じことを言ったら左大腿骨をやられました。

なんか、秋葉が妙にカタコトで『ダイジョーブ』とかいいながら治してくれたけど。

「冗談だって。俺と奈緒の仲じゃねえか」

「ちよつ、頭を撫でるなあー!」

奈緒の頭を軽く撫でて、横を抜けようとする。奈緒をからかうのは面白いけど、今はちよつとね。俺の股間（膀胱）が大変だから。

さらばだ、奈緒。

何か話したそうにしてる奈緒には悪いけど、なんか今日は流れが良くない。

うん？　なんか服が引つかかるわ。えっ、奈緒にスーツの袖掴まれてるやん。

いつの間に……。こいつっ、できる……!」

「に、睨んでも離さないからな。今日は、プロデューサーさんに、大事な話があるんだ」

大事な、話？

……勘弁してくれよ。その前置きは嫌なフラグだろ。

「突然で驚くかもしれないけど、あ、あたし」

「まて、待つんだ奈緒」

「な、なんだよ！　最後まで言わせてくれ」

いや、もうさ。良い。諦める。P諦める。でもさ、一回、一回トイレ行かせてくれよ！　マジ漏らすぞ！

「あ、あたしと、付き合ってくれ!」

……まじで告白された。

いや、なんか『次は奈緒が告白してきたりして、トラプリ制覇なんちやって』位には頭の片隅にあったけどまじか。

話になんの脈絡もない上に、トイレ前で告白されるとは。人生初めての経験だ。やだ、奈緒に初めて取られた……。ああ、尿意でなんか思考がおかしくなってる。

「えーつと、奈緒。話は分かったから、取りあえず手を離してくれ。そろそろ限界なんだ」

直立不動な青い人型のシンボルを指さす。

あつ、意味に気付いて茹でダコになった奈緒がにげだした！

いつもならここで、うまく まわりこむ んだけど、今日は空気を読む。というより本当に漏れる。

早足でトイレに駆け込み用を足す。

……こう連続すると、最初考えて否定した、ドツキリの可能性が浮上してきたな。幾ら何でも偶然トラプリの三人が俺に気を寄せてて、偶然同じ日に告白するなんて無理があるよな。

目の前で立ち会ったぶんには本気にしか見えなかったけど。あいつの演技力も大したものだ。女子三日会わざるわ何とやらだな……男子だっけ？

とりあえず家に帰ろう。

明日一日様子を見るんだ。それではつきりさせる。

一番まずいのは俺が告白されたことが、他の奴や社長にバレることだ。場合によってはそれだけで解雇になりうる。若しくは担当を外されるかもしれない。

でも流石に大丈夫だろう。凜たちもわざわざ自分で言いふらさない……よね？

凜の時も加蓮の時も二人きりの密室だったし、今だって、近くに人のいる気配はない。

あれ？ なんでだろう。こんなところに未開封のスタドリが落ちてる。ラツキー。拾っておこう。

—————

はあ……憂鬱だ。仕事に行きたくないなんて初めてだ。これからは少し杏に優しくしてやろう。行きたくないのに行くのは、こんなに辛いのか。

「そなたー？」

事務所のドアの前で立ち止まる。

なんだこれ。入れない。まさか中に念の使い手がっ!?

取り敢えず俺は携帯のメールボックスを開いた。時間稼ぎとか言わない。

昨日、俺一人じゃどうしようもなく、俺の中の頼れる大人トップ2にそれぞれメールで相談した。もちろん誰から告白されたのかは伏せた。

返ってきた返信がそれぞれこれ。

『世界ね』

『星は……数多の輪廻を巡らすもの。悠久の幻想から目覚める刻よ』

とりあえずwebの翻訳機能使ってみたけど無駄でした。熊本弁より難易度高いつてどういうことなの？

一緒にいるとめっちゃくちゃ万能感ある癖にメールだと………どうしてこうなった？

「ねーねーそなたー」

と、いうことでここは一人でこの難局を乗り切る時。

どうすんの、俺。

今のところ俺の見立てではドツキリが90パーセント。ガチが10パーセント。

もし、これが社長の狡猾な罠だったなら……俺は恥ずかしさのあまり切腹することになる。

「ねーねーねーそなたーねーねー」

いや。様子をみると決めたばかりだ。取り敢えず今日はいつも通りを装って仕事をしよう。でも、どうあいつら三人と会話すればいいのかわからねえ。いつも通りをできるのか？

『ぶおおおおおおお！』

「だっ！ なっ、なんだっ！」

「わたくしでしてー」

「よ、芳乃。法螺貝は耳元で吹くなって言っただろ。並みのプロデューサーなら鼓膜破けてるぞ」

「それはー失礼しましたー」

み、耳ががががする。これ、後遺症とか残らないかな。突発性難聴とか。

あれ……それならもしかして合法的に『えっ、なんだって』が使えるのか……？

「ねーねーそなたー」

「どうした？」

「わたくしの歌舞伎揚をメロンパンにすり替えたのはそなたでしてー？」

ざわつと、背筋が凍りついた。

目の前の小さな存在を、自分より遥か大きい山のように錯覚する。決して叶うことはない存在だと、否応にも自覚する。

芳乃は相変わらずにつこりと微笑んでいるだけ。だというのに全身が総毛立ち、呼吸が乱れる。

逃げようにも足はおろか、指先すら動かせない。唯一動かせるのは、口だけ。

しかし、下手な答えをしようものなら……その口すらも聞けなくなるだろう。

「そ、それなら、レイナが笑いながらすり替えていたぞ」

「……なるほどー。嘘は言っていないようでしてー。それならばわたくしはー、かの者に少し灸を据えてくるのでしてー」

芳乃がパツとこの場から消える。

これ、あいつをけしかけたのが俺だとバレるのも時間の問題か？

………なんか悩んでるのが急に馬鹿らしくなってきた。人間いつ死ぬか分からないのだ。悩んでたって意味はない。

よし、ドアを開けるぞ！

ん？ 何これ。うるさつ。てか何人事務所にいるんだ？ アイドルがほとんど勢揃いじゃんか。こんな年にあんまりないぞ。

「あーっ！ Pちゃんが来たにやあー！」

「みくにちゃん！ おっはようにやあー！」

「うわ、きつつ……。ってそれより！ Pちゃん！ トラプリの三人と付き合うって本当？」

「は？ 何言ってるの前川」

ん？　もしかしてこれバレてんの？

どちらにせよ、なんでもう付き合ってることになってるんだよ。

「ちひろさんからそう聞いたにゃあ」

なっ！　あの糞緑守銭奴め！

奴の席は……空席！　休んだのか？　てことはみくはメールか何かで俺のことを聞いたことになる。

まさか、この人の集まり様はみんなちひろさんから聞いてきたのか……？

「二」プロデューサーは私と付き合うつて約束したよね「三」

待とうか……。

なにこれ。意味がわからない。

完全に身に覚えが無いんだが。

俺いつの間に彼女できてんの？　それも何股？　ヤマタどころで
すまねえよ、これ。

「……アイドルのハーレムなんてありえない」

第2話

うん。なんか理解不明過ぎて逆に冷静になる。

この場にトラプリの三人が居ないのが救いだ。別にやましい事してる訳じゃないけどね？

目の前の光景。アイドルが集まっているのはまさに壮観であるが、彼女らも女である。

女三人集まると姦しい。今は女が沢山。姦姦姦しい位か……。

流石にこれは俺の手には負えないわ。だってしようがない。俺だって人間で男ですもの。

こういうのは冷静に一件づつ対処するのがよろしい。RPGで学んだ。

圧倒的人数不利だし。確実に負けイベント。クソゲーである。

「あー、取り敢えず今から一人ずつ面談するから、順番に応接室に来てくれ。まずは前川、お前だ」

「にやっー」

みくの耳がビーンと逆立つ。どうなってるの？ あれつけ耳だよね。

なんか心なしか事務所の温度が二、三度下がった。

説教されると勘違いしてんのかな。違うよ、怒ってないよ。

まあ真面目な話なのは確かなのだが。ある意味では説教に近くなるのかもしれない。

もし、社長に『いやー、なんか俺ー、アイドル（複数）と付き合い合っていました』なんて言ってみろ。俺の首どころか社長が心労でぶっ倒れるかもしれん。社長もいい年だし。

応接室で座っているとノックの音が聞こえた。別にそんななんいらなのいに。

「みくか。座ってくれ」

「う、うん」

「それで、さっきの話について詳しく聞かせてくれるか？」

みくはおもむろに座ると、俺の言葉を聞いて呆気に取られていた。

「な、なんだー。そういう話？ もうっ、みくたちPちゃんをガチ切れ

させたのかと勘違いしたじゃん！」

「は？　なんでそうなるんだよ」

「だって応接室って今まで説教でしか使われてないし」

「ん、あー。そうだっけ」

うーん。確かに、仕事の話は会議室でするし、ちよつとした話は休憩室でした。なんなら俺のデスク前でしていたな。

取り敢えずみくにもう一度同じ質問をする。

「それで、俺とみくがいつどう付き合ったのか教えてくれ」

そしたら、今度は急にもじもじし始めた。

「あれは確かーって、もう。わざわざみくに言わせるなんて、Pちゃん意地悪にやあ」

「……………続けてくれ」

色々突っ込みたいが、ここは我慢。

「あれは確か……………みくがまだ駆け出しで一人でセルフプロデュースで活動していたところにや」

それからみくはぼつりぼつりと続けた。

要約してみると。

「つまり、俺がみくに告白をした。その言葉は出会った時の『俺がお前をプロデュースしてやる』って言葉だったと…………」

「そうにや」

「馬鹿じゃないの？」

「えっ、酷くない？」

酷くない。普通はプロデュースするという言葉に他の意味を見いださない。まして、俺はプロデューサーでみくはアイドル。プロデュースなんて一通りの意味しかねえよ。

というかどうりで初めから距離感が近い訳だ。おかしいと思ったもん。なんか頻繁に買い物誘われるし、俺の家に着いていこうとしたり。

この事務所のアイドルになって一日目でこれだったからね。今もなぜか俺の膝に居るし。っ、あれ？

「お前なんで俺の膝に座ってるの!？」

「ちよつと、耳元で大声出さないでよね」

「いやいやいや。無理あるだろ！ 普通体面のソファに座るよね！」

「だったら最初につっこめばいいのに。正直今更にやあ」

「いや、取りあえず降りてくれない？」

「いや」

なんか口で言っても全然聞かないので引つpegがそうとしてるんだけど、全然離れない。なに？ みくこんなに力強かったっけ？

っておいおいおい。反転して足と腕を体に絡めてきやがった！

そ、それは胸が当たって……ほ、ほんとにやばい！

ちっ、奥の手を使うしかないのか……！

「悪いなみく……お前が悪いんだ」

「へっ？ Pちゃん何するってあつ、あはははははは。ちよ、P、Pちゃん！ や、やめるにや！」

そう、ちよちよちよである。これ、実は小学校の頃からの俺の特技である。昔はよく同級生を失禁させていたものだ。

取り敢えず脇と腹をくすぐるけど……これ大丈夫かな。セクハラとか……。絵面的には完全にアウトなんだけど、まあ誰も見ていないだろうから大丈夫か。

適当にくすぐっていると、みくの拘束もほどけたので、止めてやる。つか、息乱れてるみくめつちやエロいな。いやいかん。担当アイドルに欲情するなんて持ったの他だ。

「……落ち着いたか？」

「うう。もうお嫁に行けないにや……」

いや、ちよつとくすぐられたくらいでそれは過剰じゃね？

「……じゃあ、本題に戻るけど。お前は勘違いしてるんだよ。俺は別にみくに告白してないし、付きあってもいない」

ちよつと気が引けるけど、ここははつきりさせないと。

俺の言葉を聞いたみくはガンつと落ち込んで見せ、耳をへこませた。なに、その耳生きてんの？

「う、嘘だよ。だ、だってあの時Pちゃん言ったよね！ みくをプロデュースするって！」

「言ったけど、それは一流アイドルにするって意味で。その、色恋とかそういう話じゃない」

「う、嘘にや……………」

あ、涙声になった。なんかすつごい罪悪感。俺全然悪くないのに。俺全然悪くないのに！

そうだよ。俺別に悪くないよね。思わせぶりの言葉をささやいたわけでもないし。

「まあ、なんだ。その、そんな顔するな。俺がちゃんと責任持つて、これから先ずつとプロデュース（仕事）してやるから」

「え…………？ こ、これから先ずつとプロデュース（結婚）？」

「うん？ そりゃあな。俺が他の奴にみくを渡すわけないだろ」

そう言うともくは涙を拭って立ち上がる。なんか顔がにやけてる。いや、泣き止んだのは良いけど、情緒不安定じゃない？

「み、みくは！ そんな言葉で簡単に堕ちたりしないんだから！ だ、だからそういうのはちゃんと色々用意してから言つてよね！」

みくはそう吐き捨て部屋から出て行った。……色々ってなんだよ。ステージと衣装？ あつ、なんか凄い嫌な予感する。なんか大変なことをしてしまったような。

どうしよ、秋葉のタイムリープマシンで過去に戻ろうかな？ ……ま、大丈夫だよ。嫌の予感ってだけで、むやみに過去を変えるわけにはいかないし。

あ、そういえばみくにやんに次の人を呼ぶように伝え忘れた。にしてもみくがこの調子だと他の奴らも同じ感じかな？

俺の言葉の意味をはき違えてた、みたいな。

以下、ダイジェスト。

「わたしと同じメモ帳を買いましたよね!？」

「えっ、メモ帳ってそんな意味あんの!？」

「プロデューサーちゃまはわたくしの手をひいてくださったのではないですか!」

「いや、手くらい引くだろ」

「そ、そんな。わたくしの初めてを奪ったのに……あんまりですわ」

「ちよつとやめてそのセリフ。俺社会的に死んじゃうから」

「ここに来たらPさんとお酒が飲めると聞いて」

「……飲めません。ちよつと空気読んで楓さん」

「……しゅん」

「いや、しゅんじゃなくて。てかそれは口で言うものじゃない」

「カワイイボクが来ましたよ!」

「冗談は顔だけにしてくれ」

「なっ! ボクの顔がカワイくないとでも言うつもりですか!？」

「カワイイ」

「ふふーん! そうでしょう。もっと言ってくれてもって、なんで部屋から押し出すんですか! つてちよつと! ボクの扱いだけ酷くないですか!？」

「待てますか」

「ごめん橘、待てないわ」

「あります!」

「わかるわ」

「わからないです」

「私と夜道を歩いている時に……プロデューサーさんが『月が綺麗だ』と」

「(やべえ、言ってるやん) あー、うん。あー、ね。……チェンジで」

「私の料理を食べて、毎日でも食べたいって言ってくれたよね」

「まあ確かに毎日でも食べたいけど」

「ならもう結婚だよな」

「いや、それはおかしい」

「そ、そんなバグ、ありえないっ……」

「おーいプロデューサー。もうこっちは飲み始めてるんだから、早くこーい」

「うるさいぞ、佐藤」

「なっ！ そんなに大声出してねーだろ」

「……なにがうるさいんだろう……顔？ いや、存在かな……？」

「スウィーティーボンバー！」

「痛って！ ちょっと！ 嫁入り前の女が馬乗りなんてするな！

あっ、駄目、グーは痛いって！」

「あ、あの子がちょっと怒ってる」

「は？ ちょっと待って、あの子って誰のことだよ」

「そ、そんなに仲が良いのに……。本当に、付き合っていないの？」

「そんなについて、やだなー小梅。なにが見えてんの？ なんか俺全体的に体が重いけど今どうなってんの!?!」

「今年はキャッツが絶好調ー！」

「交流戦が鍵だな」

「また一緒に観戦行こーね！」

「プロデューサーがドラクエやってる時、ナターリアに言ってくれただよー！」

「ドラクエ……ああ、お前がやけに喜んでた復活の呪文か。なんだっけ？」

「Eu quero passar o restante da minha vida ao seu lado (エウ・キエロ・パサル・オ・ヘスタンチ・ダ・ミーニャ・ヴィーダ・アオ・セウ・ラード)！」

「ああ、そうそう。そんな感じ。ロンダルキアの洞窟がきついんだよなー」

「えっー！ 一緒に遊園地の観覧車に乗ったらもうカレカノだって本に書いてあったのに！」

「いや。お前……。莉嘉にはまだそういうの早いって」

「アタシはもうオトナだよ！ ううー、計画が狂ったー」

「まあ、その内大人になつて本当に好きな人が出来るだろうから、その時にまた頑張ればいいって」

「それがPくんだったらどうするのさー！」

「うん？ まあ、ありえないだろうけど、そんな時は……付き合うか」

「ぷろでゅーさー……いっしょに、おひるねしよー」

「ん、ああ。もうそんな時間か。ってことはあいつら昼前から飲み始めたのか……？」

「あいつらー？」

「ん。こずえには関係の無い駄目な大人達だ。こずえはあんな風になるなよ」

「ふわあー……」

「この事務所にアイドルをたぶらかしているプロデューサーが居ると聞いて」

「チェンジ」

「ギルティ！」

「つちよ、おまつ！ 酔ってるのか!? ギブギブつ、折れる折れる！」
「ある程度の年齢のレディにそんな暴言を吐くプロデューサーが悪い
わよねえ」

「ぶぶつ、レディって」

「……プロデューサー、もしかしてまだ自分が死なないとも思ってる?」

「は、ちよ、う、嘘でしょ!」

「早苗百二十パーセント!」

以上。ダイジェスト終わり。

疲れた。くつそ疲れた。てかあの巨乳合法ロリの性で体の節々が
痛いんだけど。

俺じやなきや死んでたね。

本当はもつと相手してたきもするけど、思い出してたらきりがな
い、というかサナエサン以降記憶が曖昧だ……。

にしても、全員ほぼ冤罪というか勘違いによるものだと分かった訳
だが、どうすればいいんだ。とりあえず全員に『付き合ってる』つ
て風に伝えはしたんだが、うーむ。

「そなたー」

一件落着……なのか? いや、そんな簡単なことでもない気がする
が。

「ねーねーそなたー」

うーん。ま、ひとまずこの件がマスコミや業界の関係者にバレてな
さそうなことを喜ぼうか。いきなり週刊誌にすっぱ抜かれる可能性
もあつた訳だから。

疑惑ってだけで俺の人生は終わってしまう。

にしても、俺って案外モテるんだな。小学生中学生組はともかく、
高校生組とかに好意寄せられてるってことは、俺モテるんじゃない?

今までずっと彼女いなかったけど……。

んん!? ちよつと待て……。ドッキリ……。なのか……。?
昨日のアレから今日までずっとドッキリだったのでは?

やばいありえる。そっちの方がアリエールでしょ。

むしろそっちの方が可能性高いわ! 何だよ。さっきまでモテるとか言ってた自分を闇に葬り去りたい!

闇に飲まれよ!

「ねーねーそなたーねーねーねー」

「おっぱあつ! ネ、ネクタイを掴むのは、や、やめ」

あ、なんか目の前が白くなっていく。

っ、危ねえ。並みのプロデューサーならこのまま昏倒していたぞ。

「なんだ。芳乃。なんか用か?」

「どつきりとはーなんでしょー」

「ん? ああ、芳乃はまだ体験したことなかったか。ドッキリつてのはまあ、本来ありえない様な状況を作って、その相手の反応を見る、まあ遊びみたいなものだな」

「ほー。そなたはーそのどつきりとやらをーされているのですかー?」

「うーん。それがいまいちはずきりしないんだよなあ」

ナチュラルに心を読んだり、何処からか湧いて出たりしてることに疑問を思わないわけでもないが、芳乃だからなあ……。

「とりあえずPちゃんその辺確かめに社長と、あと、そうだな他のアイドルのどこに行つて様子見てくるわー」

ドッキリなら間違いなく社長とちひろさんが一枚噛んでるだろうからな。

でもこれがドッキリだったなら俺は、しばらく女性不審になるかもしれない。

応接室のもう一つの扉に手をかける。実はこの部屋、事務所と廊下とそれぞれ繋がっているのだ。

今事務所はまるで駄目な大人アイドル、略してマダオで混沌として
いるだろうからな。

君子危うきに近寄らず。

「そなたーそなたー」

振り返ると芳乃の小さい手が優しく俺の手を包んだ。

「わたくしは、そなたのことを切に思っているのですー」

「……急に、どうした？」

「うーん。これはどつきりになるのですよーかー？」

「ああ、なんだよ。こりゃ一本取られたな」

びっくりした。不覚にも胸がとうんくしてしまった。だが、芳乃め、ドツキリだと？ くそ、なんて小悪魔だ。今この調子じゃ大人になつた時って……芳乃は意外と16歳だったな。つい忘れそうになる。

悔しさ半分に芳乃の頭をごりごりと撫でた。

そういえば麗奈様は無事かな。うむ、とりあえず黙祷を捧げよう。

第3話

昨日ぶりに入る社長室は様子が違った。いや、どこがどう違うっていうのは分からないけど、なにか違うような。

うーん。何が違うんだろう。そういえばこの部屋こんなに観葉植物置いてあったっけ？

少し近くで見ようとしたら、椅子に偉そうに座る社長が口を開いた。いや、実際偉い。

「それで、何かな。私に用とは」

「あー、いや、何か噂で聞いたんすけど、社長、というか皆が俺になんか秘密にしていることがあるらしくて。その」

慎重に探る。

言葉選びを間違えると大変なことになる。ないとは思いたいけど、社長の思いつきでクビになる可能性だってあるのだ。

『ん、ティンときた。君クビね』

ありえないと否定できないのがつらい。

「それで、社長にそれを聞きに来たんです」

「ほう……………」

しゃちょう の ならみつける

P の ぼうぎよ が さがった！

社長は何も言わない。必然的に部屋が静まる。

無言の時間がめっちゃ辛い。社長なんか言ってくれよ。イエスでもノーでもいいから。

なんか変な汗が出てきた。

「ふう…………。流石に敏腕プロデューサーの君は騙せないか…………」

「っ！ ええ、ウルトラプロデューサーである俺は騙されなйтすよ！」

「いや、敏腕…………まあいいか」

なんかそれっぽいこと言ったら釣れた。

「それで、何を隠してたんですか？」

「うむ…………。とても言い辛いのだが…………」

そういつて、社長は一枚の紙を取り出した。

開かれた紙には何やら数々の項目と、それに対する評価が書き込まれている。

「これって……」

「うむ。私の今年の……健康診断の結果だ」

「っ。な、なるほどー」

危ない。『知らねえよ！』って言って、紙を床に叩きつけるところだった。今はアイドルと話してるわけじゃない。気を引き締めよう。

改めて社長が手渡してきた見てみる。

渡された紙は真っ赤だった。いや黄色もあるけど。カラフル過ぎて目がチカチカする。

「社長、これ……」

「言うな。言わんでくれ。分かってる。最近酒も控えてるし、運動もしている。だから、余り口外しないでくれよ」

「えっ、はい。……え、隠し事ってこれ。だけですか？」

「そうだが、まさか君は別のことをいつていたのかな？」

「あ、いえ、はい。これですこれ」

「ふむ。そうか。……くそっ千川君め。あれだけ秘密にしろと言ったのに」

あ、社長のちっぴひに対する好感度が下がってる。ごめんなさいちひろさん。後悔はしてません。

「……そういえば、昨日からちひろさんの姿見てないっすね。二日連続で丸々休むなんて珍しい」

自分で言ってる悲しくなる。二日連続で休むと不思議に思われる会社って……。まあ、俺やちひろさんは酷い時は丸一日の休みがない月があるくらいだから。あれ、おかしいな。目から汗が。

前に新しいマネージャーを雇うって話があったけど、それもおじやんになったし。

アイドルたちが全員反対ってどういうことよ。誰か一人くらい、俺的に拓海とかなつきち辺りは賛成すると思ったのに、奴らも反対してた。

それでも、俺と社長で強引に話を進めて、取りあえず三人ほど新しいマネージャーを雇った。でもいざ新しいマネージャーが着任する日になると、三人が揃いも揃ってばつくれたのだ。

その時来たメールは以下のとおり。

『運よく宝くじが当たったから働く理由がなくなりました』

『運よく私の絵が認められたので、画家になる道をまた目指します』

『運よく拾った百円玉で自販機の水を買ったら、道端でせき込むおばあさんを見つけて、彼女に水を差し出したら、お礼にと彼女が経営する会社の役員に抜擢されました』

メール見てはげるかと思った。特に最後の奴。

まあそれで、結局新しいマネージャーの件は保留、と言う名の永久凍結。

現在も俺のワンオペレーション。ま、やりたいようにできるから楽っちゃ楽だけど。

「ち、ちひろくんかい？ あ、ああ。確か三日後まで休暇だそうだよ」
五連休、だと……？ ごれんきゆうなんて聞いたことない。どこの国の話？

くそ、俺だって。俺だっていつか休んでハワイとか行ってやるんだからっ！ お土産買ってきてあげないからっ！

「じゃあ、俺行きますね」

もう社長に用はない。言っちゃ悪いが社長と一緒に居たくない。なんだかんだで緊張するからな。

「そう言えば、先日のライブの結果報告はどうなってる？」

「昨日メールで送ってます」

「そうか……なら、今君は手すきなのかね？」

「え、ええ。まあ急ぎはないっすね。何か用でもありました？」

「いや、用というのはないが……。これからどこへ行くのかな？」

「えっ。ちょうどライブ上がりでオフだった奴らが近くにいらしいんで、そいつらの様子を見るに」

「ん、なるほど。よろしく頼むよ」

なにこの反応。なんか胡散臭い。なんだ、俺サボるとでも思われて

たのか？ まあオフの奴らの様子見に行くってサボりみたいなものだけだ。

○ なんか様子が少しおかしい社長を尻目に、俺は社長室を出た。

社長の様子を見るに、アイドルたちがドツキリを仕掛けているという可能性は低くなった気がする。

いや正直、あんなに可愛い子らに好意を寄せられるなんて、嘘でもめっちゃうれしいけど、仕事の意味では最悪だ。面倒極まりない。これからの事考えると憂鬱だ。

「あの、プロデューサー？ そろそろ注文をお願いします」

「ん、ああ。じゃあブレンド」

「はい！ 砂糖一つにミルク多めですよー！」

ぴよこんとウサ耳を揺らす17歳ウエイトレス。

もうアイドルでかなりの収入を得ているはずなのに、ウサミンは偶にここでバイトしている。

ここ、というのは事務所と同じビルにあるメイド喫茶。と、いつても本場にあるような本格的なものでなく、店員がメイド服を着ているだけ。なんでもマスターの趣味らしい。ウサ耳メイドは店主的にありなのだろうか？

俺はメニュー表を置く。必然的に前の少女が目に入る。そこには速水奏が座っていた。なんか意味ありげに微笑んできた。ストロー片手に。『欲しい？』と尋ねてくる。

いや、使用済みのストローはいらんよ？ それに俺注文したのブレンドだし。口の中大変なことになるわ。

「それで、珍しいわね。あなたがここに来るなんて」
「お前らがここに居るって写メ付きのメッセージ送ってきたからな。それにしても、二時間前のメッセージだったからもう居ないと思ったが、まだ居てよかった」

「会議は踊る、されど進まずってやつね。せつかくのオフをどう過ごすかって会議でせつかくのオフが一つ潰れそうよ」

フレちゃんの方見たらおもつそ目を逸らした。こいつのせいか？

「……………踊ってないよ？」

「いや、フレちゃんは本当に何回か踊ってたから」

周子がフレちゃんに突っ込みを入れる。喫茶店にはリップスのメンバーが集まっていた。

席は両隣に志希と周子。向かいに後三人。先日うちの事務所の複数ユニットで合同ライブがあったので、今日は五人ともオフになっていた。あと確かトラプリとセクパンとみくなちえりだったか？

まあ、そんなことはどうでも良い。

「志希ちゃん、そろそろ、離れ、ようねー！」

「あーん。もう少しー。あと三八スハスー。スンスン……………」

「なあ周子。この二人どうにかしてくれない？ 落ち着かない」

とりあえずこの状況をなんとかしたい。

俺にひつついた志希を引っ張る美嘉。志希が俺を離さないものだから、間接的に俺が引っ張られている。

「フレちゃんにパス」

「奏ちゃんにパス！」

「私には無理よ」

そういつて飲んでるアイスティーに口づける奏。

どいつもこいつも頼りにならない。

はあ、リップスって一人一人相手にする分には普通なのに、集まるとなんで面倒さが増えるのか。こう、少年漫画的なノリで。ひとりひとりの力は大了たことないけど、集まると無限大的な。

いや、レイジーレイジーもリップスと同じくらい面倒くさいから、原因は志希とフレちゃんだな。

「美嘉、いいから座ってくれ。志希のこれ半分病気だから」

「……………プロデューサーが言うなら」

「そうそう。あたしはしばらく会えなかった分プロデューサーの匂いを堪能するのだー」

うん。これで引っ張られることはなくなった。嗅ぐのもやめて欲しいんだけどね。

てか、しばらく会ってないって二日くらいだよ。二日でこれなら五連休とかしたらどうなるんだよ。

「それで、あなたはどうしてここに来たの?」

「ん、ああ。お前らにちよつと聞きたいことがあつてな」

「あー! それだったら事務所でしょうよ。ここカメラ回つてな……」

「フレちゃんシャラップ!」

「ん? 今フレちゃんなんつった?」

「いやいやいや。なんでもないなんでもない。だから、ほらつ。プロデューサーの話続けて?」

何か周子がフレちゃんの口ふさいでるし、美嘉が慌てるし……美嘉が慌てるのはいつものことか。奏もすました顔してるけどなんか額に汗かいてる。志希は……まだ匂い嗅いでる。

なんかおかしい。カメラがどうか言つてたような。ううむ、分かるん。

「まあ……いいけど。それで、お前ら。男と女つてどうやつたら付き合つてるって言える?」

あつ、なんか美嘉と奏が吹き出した。こいつら……許せん! こっちは本気で悩んでいるというのに。何だ、そういう経験でもあるのか? 確かに二人はこの中でも経験人数が多そうではある。

実際聞いてないけどどうなんだろう。事務所にはやんわり恋愛禁止的な空気があるけど、きっちり禁止にしている訳ではないからな。彼ピとか居たらどうしよう。もしそうなら俺の心労がまた増える。

「いや、普通に告白したらじゃない?」

「いや告白無しだとしてさ。どこまでしたら、もう付き合つてるって言える?」

「……うーん。セツ——」

「止める周子。アイドルがそんなこと言っちゃいけない」

「じゃあ、こういうことは? これはカップルしかできないでしょー」

そう言うと周子は俺の肩にしだれかかって、腕を自らの胸に寄せた。黄色ランプ点滅。色々やばいです。意外とあるんですね。何

がって、いやアレが。

「お前こういうこと、他の共演者とかにもやってねーだろーな」

「……………少し頭きた。プロデューサーさんはあたしが誰にでもこんなことすると思う？」

「ワンチャン…………？」

「ないっつーの」

周子が俺の腕をつねる。い、いでで。地味に痛い。一番リアクションに困る奴だこれ。

「プロデューサーさんだけだからね」

そういつて周子が俺を指さす。おい、お前。そんな思わせぶりなことばかり言っていると将来苦労するぞ。

「かつ、かな、奏！ ちよつとあれズルくない!？」

「くつ、席の有利を生かしてきたわね」

「…………お前らの意見も聞きたいんだけど。おーい。いや、ねえ、聞こえてる？」

「はいはい！ アタシ答えていいい？」

「お、いいね。フレちゃん頼む」

「…………あれっ、なんだっけ？」

「半月ロムつてろ」

フレちゃんはロムロム言いながらおしぼりでエツフェル塔を折り始めた。ちよつと言い過ぎたっぽい。ごめんねフレちゃん。

つか、いい加減志希離れてくんないかな。ずっとくつついてるから蒸れてきたんだけど。

「それで、美嘉と奏はどう思う？」

そもそも、フレちゃんと志希からまともな回答を期待していない。フレちゃんはフレデリカだし、志希は天才過ぎて何言ってるか分からないからだ。なんだっけ。ふえ、ふえにるえちるあみんとか。

「…………そうね。私はキスだと思っわ。フレンチの方の」

「お、おう。奏らしいな」

奏の感覚で言うなら、俺は付き合っている人はいない。

「それで、美嘉は？」

「フレンチ？ あつ、え、うん。アタシは、んー。……………手を繋いだらかな」

手を、繋いだら…………？ おい、俺は殆どのアイドルと手をつないでいるぞ。つまりもう全員と付き合っている…………？ だってカリスマギャルがいうんだから、恐らくこれが世間一般の感覚に違いない。

周子と奏が美嘉を見て爆笑してるけど、そうに違いない。カリスマギャルだもん。きっとそういう経験も豊富に違いない。

美嘉の話を根拠にするなら、過失は全て俺にあることになる。

社長はこの問題を知った時、当然どちらが先に手を出したのか聞くだろう。いや、聞かないで問答無用で俺が悪者になる可能性も十分あるが、それは置いておく。

俺がアイドルを勘違いさせた、ということになると、俺の責任は重大だ。

…………いや、どつちにしろ首になるだろうから、考える必要は無いか。

問題はどう隠し通すか、だな。

うーむ。…………どうでもいいけどコーヒー遅いな。

第4話

午後五時。何というか午後五時ってカタカナにすると強そうじゃないか？ ゴゴゴジツ！

いかん。フレちゃんを戯れすぎた性で、思考がエツフェル塔になっている。そろそろ、喫茶店を出よう。

奏たちはまだ喫茶店に居座るらしい。

ごめんねウサミン。そいつらの相手、疲れるでしょ？ と、ウサ耳メイドを労わると、そんなことないですよ、と元気に笑った。

——天使は、ここに居たのか。

今度サロンパス買ってあげるから……経費で。

テーブルに千円札を置き、颯爽とその場を去る。こういう時、少し多めに置くのがスマートな大人なのだ。

だというのに、周子は俺のポケットからすつと財布を奪い、俺の諭吉を一人攫った。

「今日の夕飯はプロデューサーの奢りねー」

イエーイと湧くアイドルたち。

は？ いや、キレるな。ここは大人な対応を見せる時。

「おい、こら、テメエ！ 俺の一万円返せよ!!」

「いやーん。シューコちゃん襲われちゃうー」

強引に奪いに行く。が、周子は椅子に倒れる形で俺の手を避ける。奪おうとした勢いで、俺は周子の上に乗ってしまう。

向かいの机からパシヤリというシャッター音。

携帯を構えた美嘉と、俺の下にいる周子がぐつとサムズアップする。

状況を整理しよう。アイドルに馬乗りになる俺。服が乱れた周子。なるほど。これが、チエックメイト、か……。

「臨時収入ね。みんな、どこが良い？」

「んーフレちゃん焼肉！ 叙々えーん！」

「無理よ」

「あたしもフレちゃんにさんせい。今日はやきにくのきぶんー」
「だから一万円で叙々苑は無理よ」

俺抜きで高級焼き肉店に行こうとしてやがる。悔しい、俺の夕食はもっぱら吉野家だぞ！

別に、大切なアイドルだし？ 俺も、残業代でそこそこ金貰ってるし？ 一万円や二万円程度、全然痛くないけど？

……わるい。やっぱ、つれえわ。

これは、一手報いたい。 勇気はどこに？ 僕の胸に！

してやったり顔の周子。 薄給のPの覚悟を舐めるなよ。

「えっ、ちよつとPさん？ えっ!？」

ふむ。そのまま顔を周子の首筋に近づけてみたけど、どうしよう。ここまで来て理性が邪魔をする。流石に、このままおっぱいを揉むのは事案ではないか？

ううむ。ま、匂いを嗅ぐくらいならセーフだろ。俺だって志希とかに嗅がれてるし。

すん。すんすんすん。

「P、Pさん。流石のあたしも、それは恥ずか——っん」

え、なにこれめっちゃ良い匂い！ 香水？ 香水なの？

こう吸ってるだけで、ぶわーつと脳内に快楽物質が出るような、んでその快楽物質が股間に溜まるような——って、いかん！ 俺のPちゃんがPちゃんしようとしている。それはマジでやばいでしょ。美嘉なんてまだ携帯持ったままだろうし。

周子に覆いかぶさったまま、美嘉の方をみると、幸い奏と美嘉は白目をむいて固まっていた。それをフレちゃんが指でツンツンと突いている。

どうでもいいけど、美嘉の携帯ビビってね？ え、握力いくつあるの？ ゴリラか？

って、志希がない。俺としたことが、あのトラブルメーカーから目を離してしまった。

探すと、後ろで「叙々苑ー」と鼻歌まじりで俺の財布をいじくっている奴の姿が。

「お前、俺から諭吉を更に奪う気か！ ゆるせん！」

周子から離れ、志希の元へダイブ。さながら気分はルパン三世。だが流石ギフテッド。さらりと、俺の不意打ちを避け、手に持った三人の諭吉を自身の谷間にしまいこみ、俺の体に絡みつく。

「にやはは。嗅がれるのも楽しそうだけど、志希ちゃんは嗅がせてもらいまーす」

「ちよ、お前、忍者かよ!?!」

「忍者の話と聞いて！」

「いや、してないから」

「そうですか……………」

なんか別なアイドルが横を通り過ぎたが、気にははいけない。それよりも現状を打破しないと。

こうピツタリとくつつくと、肌まで触れ合つて、辛い。めつちやすべすべやん。

「さー。どーする？ このままあたしたちと焼肉に行くなら、五ハスハスで許すけど」

「五ハスハスって、一ハスハスがどんくらいかわかんねえよっ！」

「んー。一分が一クンクンで、十クンクンが一ハスハスかなー」

「五十分じゃねえか！ そんなにこの状態でいられるか」

俺には仕事はまだ残っているのだ。と、いつても杏たちを迎えに行きただけだが。あいつら、俺が車で迎えに行かないと拗ねるんだよ。

む、少し身じろぎしただけで、色々擦れてヤバイ。

「ねー、キミ、蛇の交尾って知ってる？」

「知るわけないだろ…………つて、なんだ抜け出せないっ！」

「無駄無駄ー。でさー、蛇つてこう、体を絡め合いながらー何日も……………」

「ち、ちちちちよっ!?!」

さわっと、触れるか触れないかの力加減で、俺のPちゃんに志希の手が当たる。まるで熟練の痴漢のような技。こいつ……………できる！

なんてふざけてる場合じゃない。このままじゃ、喰われる。いや、童貞を捨てるチャンスだし、全然喰われてもいいし、むしろウエルカ

ムなんだけど。

だが、ここは店内。残念ながらアウト……！ コンプライアンス的にも駄目……！ 逮捕……！ 圧倒的逮捕……！

半ば力づくで、志希の拘束を解く。なんだかんだ無理やり脱出するのは、アイドルを傷つける可能性があるからしたくなかったのだが、緊急事態だ。仕方がない。

だが、解いても志希はしゅるりとまた俺の体に絡みついた。

蛇めっ……！

体勢が変わり、今度は俺の頭が志希の太ももに挟まれ、志希の頭が俺の股間へ。

「だから無駄だつてー。あたしの52の関節技からは逃げられないよー。このまま二人で、解け合おつ」

「ちよつ！ そこは！ マジでハスハスすんな！ お婿に行けなくなるってー！」

「へー。だったら、キミと二人でずっと一緒にいられるね」

「くそつ！ もう誰でもいい！ 奏、美嘉、周子、はショート中か。ちっ！ パターン青、志希だ！ フレちゃん発進！」

「……………すやあ」

「寝てる！ この状況で、寝てる！」

フレちゃんはブランケットを使って本格的に眠っている。万事休す、か。もはや身を任せるしかない。

さよならコンプライアンス。さよなら童貞の俺。

と、思つて身を預けていたが、いつまでも快感はやって来ない。と
いうか、目を瞑っていて分からなかったが、志希が俺の上から消えて
いた。

「大丈夫ですか？ Pさん」

「ウサミン……」

「もー。アイドルとのコミュニケーションも良いですけど、未成年の
アイドルにあんまりやり過ぎるのは駄目ですよ」

頬を膨らませて少し怒る菜々。

志希はウサミンJKチョップでのされたらしい。安らかに眠って

いる。

未だに固まっているリップスのメンバーは放っておいて、俺は床に散らばる諭吉を財布にしまおう。あれだけ暴れたら、いくら志希の胸に挟んでいても落ちる。

今度こそ店を出よう。周子に取られた一万円は……まあ、いいか。慰謝料だ(ゲス顔)

さつきは冷静じゃなかったけど、これセクハラだよな。社長に知られたら……考えるのはよそう。叙々苑用にもう二枚万札を置いておく。

「あれ？ もう帰っちゃうんですか？」

「ああ。杏たちを迎えに行かないと。きりりから怪文書が二通も届いてる。急がないとハピハピされる」

「あの……未成年のアイドルにやり過ぎるのは駄目ですけど、その、ナにはしても大丈夫ですよ？」

「ん？ 菜々も未成年だろ？」

「はっ！ いえ、そうなんですけど……」

ウサ耳がしゅんとしぼむ。最近、菜々とみくの付け耳は生きてるんじゃないかと思いはじめた。

うむ。腰をさすってあげればいいのかな。

「あつ……」

「ライブもバイトもお疲れ。菜々にはいつも助けられてる。本当ありがとな」

無難に頭を撫でることにした。

アイドルの頭を撫でる、という行為は客観的に見たらキモいが、小学生アイドルにねだられて撫でるうちに、気にならなくなった。職業病だろうか。

「はい！ これでウサミンパワー全快です！」

「えっ、どういう理屈で……？」

「それはー、内緒です！ キャハ！」

びんびんと隆起するウサ耳。確かにエネルギーがチャージされている。俺の手にウサミンパワーをチャージする力があつたとは。

ひよっとして俺はウサミン星人だったのか……？

○

社用車を飛ばして二十分弱。飛ばすと言っても信号が幾つも建つ町中ではそんなにスピードを出せない。

車をとある民家に止める。外装は明らかに一般宅だが、中は小洒落たカフェである。芸能人御用達の隠れ家風カフェというものだ。

杏ときらりと智絵里が中で待っているらしい。収録現場からタクシーで来たとか。

あの、タクシー使うんだったら、そのまま事務所にタクシーで来てくれないですか？

こればかりは、何故か優等生である智絵里や菜々まで受け入れてくれない。極力俺が迎えに行かなければいけない。

うちのアイドル何人いると思う？ アイドルの送迎の合間に仕事をこなして、偶には収録の様子も見に行つて、二千円札よりもレアな休日は、アイドルとのコミュニケーションで潰れる。

今日は確か……十七連勤目か。あれ、おかしいな。目から汗が流れてくる。

もしかして、俺に彼女が出来ないのも、俺が童貞なのも、この仕事の性なのか？

以前、俺を合コンや風俗に誘ってくれた友人が居たが、彼らは悉く消えてしまった。幸運、不幸、謎の黒服に拉致、ヤクザに拉致、ロボットに拉致、忍者に拉致、異世界転生。理由は様々。

だが、その所為で俺を合コンに誘う勇者は、業界にはいなくなつてしまった。

ふと、アイドルたちに告白されたことを思い出す。どうせこの仕事を続けていても彼女は作れないのだから、クビになる危険を冒してでも、付き合うべきではないか。

仮にクビになつたとしても、大手を振つて彼女を作れるじゃないか。……無職童貞に彼女ができるかどうかは別にして。

扉を開けてまず階段。二階の店内に入ろうと、扉に手をかけた瞬間
びりつと総毛だつ。理由は不明だが、嫌な予感がする。このまま扉を
開けたら、碌でもない目に合うような、そんな予感。

まさか、芳乃のねじり揚げをマカロニとすり替えたのがバレたのか
？ もしくは事務所にある芳乃の歌舞伎揚げを、高い棚に隠したのが
バレたとか？

いや、前者はレイナ様の所為にしたし、後者もちひろさんの所為に
できているはずだ。

なら、憂うものは何もない。この悪寒も、きつと気のせいだ。

ガチャ、と扉が開いた瞬間――

「によわー！ Pちゃん遅いにいー！」

トラックにぶつかったような衝撃が全身を襲い、ふっ、と意識が体
から離れていく。

――あ、死んだ。

第5話

体がわたのように軽い。

黄金色の柔らかな光が俺を包みこむ。一体何事か。そう思つて周囲を見ると、雲、雲、雲。なんと空を飛んでいるではないか。

現在進行形で浮いていく体。なんとかしようともがいても、体はどんどん浮かび上がる。下を見ると、家や車が豆粒のように小さくなっていた。

ふと、自分が抵抗している理由が分からなくなった。このエナドリを三本一気飲みした時のような高揚感。こんなに気持ちいいのに、なぜ抗う必要がある。

目線はどんどん高くなり、光はどんどん強くなる。

やがて、境界の彼方に白く輝く宮殿が見えた。穏やかな風が肌を撫でる。

——なるほど。ここが天国か。

『ぶおおおおおおおおおおおおおおお！』

——心地良さに身を任せ、波のように迫るこの睡魔に身を任せてしまえ。ここには、早朝出勤も残業もない。

『ぶおおおおおおおおおおおおお！』

——羽の生えた天使たちがラツパを吹く。心地良い、ん？ 心地よい？ いや、やかましい音色が空を彩る。

『ぶおおおおおおおおおおお！』

あれ、これ本当にラツパ……？ あ、これラツパじゃない、ほら貝だ。

「あ、あの……芳乃？ そのほら貝、うるさいから止めてくれない？」

「わたくしたちを置いて行こうとしたそなたが悪いのでしてー」

「あれ……芳乃怒ってる？」

「いいえー。ただわたくしが言いたいののは、そなたはここで死ぬ運命さだめではないということですよー」

芳乃が言い終えた瞬間、体が重さを取り戻した。目測高度数千メートルからの落下。吸い寄せられるように一点に向かって墮ちる。み

るみる地面が近くなる。

「やばいやばいやばいっ！ ぶつかるって！」

そしてある建物の屋根に体が触れた瞬間、意識は反転した。

—————

目を開けると強い光が差し込んだ。眩しくて腕で顔を隠そうとするが、何故か両腕とも動かないので、首をひねり顔を光源から逸らす。「あ、良かった……目が覚めたんですね。きらりちゃん、杏ちゃん。Pさん起きたよ」

透き通るような高い声が上がから降ってくる。見ると、そこには大天使チエリエルが降臨なされていた。どうやら俺は彼女に膝枕をしてもらっていたらしい。

智絵里に悪いので起き上がろうとするが、どうも体に抵抗を感じて起きれない。

いやー、仕方ないなー。女子高生に膝枕してもらうとか、世間的にヤバいけど、動けないもんなー。

後頭部に感じる膝の感触を味わいつつ、眼前の美少女を眺める。なんて贅沢なプレイだ。一時間幾らですか。言い値で払います。

「おはようございます。心配したんですからね？」

目が合ったら笑った。そして頭を撫でてきた。まずい。このままでは浄化されてしまう。

何故体が動かないのか。見ると、杏は俺の腹に乗って右腕を掴んでおり、きらりがソファの下から俺の左腕を掴んでいた。

その間も俺の煩惱は刻一刻と浄化されていく。このままでは聖人不能になってしまうので、強引に起き上がる。杏を掴まんで体から降ろしソファに座らせる。智絵里が残念そうに見てくる。くっ……なんだその物欲しそうな目は。Pちゃんはそんな簡単に屈屈しないんだからね！

「ありがとなチエリエル。俺どれくらい寝てた」

「チエリエル……？ あ……えっと、三十分くらいです。救急車を呼

ぼうとも思っただんですけど……店の人が、軽い脳震盪だろうからしばらく様子をみようって」

「げっ、三十分？ そんなに寝てたのか。まいったな」

智絵里に言われ時計を見る。次の予定までもう時間がなかった。

「によわあ。ごめんねPちゃん。きらりの所為で」

きらりに左腕を引かれる。みると彼女の目は潤み、今にも涙がこぼれそうだった。

「気にするなつて。俺は平気だから。あれくらいで参ってたらプロデューサー務まんないから。——ちよつと待て。きらり、お前ももしかしてずっと床に座ってたのか？」

「う、うん。きらりの所為なのに、きらりがソファに座るわけにもいかないから」

「馬鹿。お前そこ立ってみろ」

コンクリに薄い絨毯が敷かれただけの固い床。当然というか、彼女の膝は赤くなっていた。

杏と智絵里がばつの悪そうにする。

「私や智絵里ちゃんもソファに座るように言っただけだけどねー。きらりが頑なでさ」

「ご……ごめんなさい。私ももつと強く止めるべきでした」

「いや、お前らに責任はないつて」

立ち上がりきらりと向き合う。百八十あるきらりの身体は一回り小さく見えた。

その頭に智絵里直伝のチョップを当てる。

「もつと自分の身体を大事にしろよ。お前らに怪我されると、俺が精神的にきつい」

無論、感情的な意味と仕事の意味の両面である。恰好がつかないので後者については言及しない。

「むえー。ごめんにい」

「いつまでもそんな顔するな。杏もだぞ」

「げえっ、なんでそこで杏に飛ぶのさ」

「目腫れてるぞ」

「なっ！ 相変わらずデリカシーのないプロデューサーめ」

「うえへへ……ありがとお。Pちゃん」

少しだけ場が和んだのでほっと息を吐く。

「よし。じゃあ、遅くなっただけけど今から事務所に送るから。杏ときらは家に送ってもいいがどうする?」

「えーもう行くの。杏、仕事頑張ったんだから、もう少しここでのんびりさせてよ」

「悪いが俺にはこの後にも仕事が残ってんだよ」

「きりりもお、もう少し居たいなあー。最近Pちゃんとゆっくり話をする機会がなかったしい」

「げっ、きりりまで。智絵里はどうだ? 帰りたかったりしないか?」

意外と常識人であるきりりに言われると立場が悪い。確かに最近アイドルたちのコミュニケーションは減っている。

意見を求めて、智絵里に視線を送る。

「わ……私は倒れたPさんが直ぐに運転するのは心配です。まだ起きたばかりですし……そ、それにつ、私もPさんとお話したいです!」

智絵里がぐつと拳をにぎり力説する。確かに、事故って彼女たちに怪我でもさせたら洒落にならない。

「俺、そんなに面白い話持っていないぞ?」

「プロデューサーの話に落ちがないのはいつものことじゃん」

「おいてめ杏。今なんつった」

「ぐえー」

デコピンすると、杏は気の抜けた声を出す。

心外である。これでも俺は美容院なんかに行くと『面白い人ですねー』と言われるのだ。それに、この間だって笑美とM-1予選に出場して二回戦までいった。

智絵里の方を向くと、彼女はにつこりと微笑んで言った。

「大丈夫です。私はPさんの話なら面白くなくても平気です」

「やめて智絵里。その言い方だと俺が凄くつまらない奴みたい」

不思議そうに首を傾げる智絵里。え、待って。俺って話つまらないの? そんな顔しないでよお!

「まあまあ、座って座ってえ。少しくらいきらりたちとゆっくりしよお?」

「はあ、分かったよ。コーヒー一杯飲み終わるまでだからな」

きらりに背を押され席につく。

その後四人で他愛のない話を続けた。俺の爆笑トークは不発だったとだけ言っておこう。

—————

杏ときらりを家に送り届け、智絵里を事務所に置いたところですが、さま車に戻る。

寮組以外の子たちを送迎しないといけない。出勤しているアイドルの数にもよるが、二時間近くかかる日もある。

社長……流石にドライバーくらいは雇ってください。Pはもう限界です。

渋滞の所為で、全員を送り終わるとかなりの時間が経っていた。

急いでライブハウスに向かう。都内でも最大規模の箱。今日はロックザビートのライブの最終日だった。日程中の何処かで行くと約束したので急がないといけない。

時計の時刻は絶望的。どれだけ急いでも最後の曲に間に合うかどうかといったところ。

だが、余り心配はしていなかった。李衣菜はぶーたれそうだが、夏樹のことだから、笑って許してくれるだろう。

いよいよ会場まで目と鼻の先。八時半。ライブのセットアップを考えてもぎりぎりだ。

信号待ちしている車の前を、沢山の人を通る。手には名前入りのうちわといったライブのグッズ。

どうやら間に合わなかったようだ。

関係者パスで控室に向かう。李衣菜にどう言い訳をしようか考えていた。

……うーん。適当にロックとか言ったらなにかなる気がする。パタパタ駆け回るスタッフの間を抜け、控室に入る。まだライブが終わったばかりだからか、タオルから覗く二人の肌には朱が差していて、どこことなく艶っぽい。

もし俺がハーレムプロデューサーだったら、ここで二人を持ち帰りロックな一夜を過ごすのだろうか、それは夢の又夢。そんな話はアダルトビデオの中だけだ。

「お疲れー」

俺が来たことに気付いたのか、夏樹の肩がぴくりと動く。が、挨拶に対しては無反応。

「さっきスタッフの子にちらっと聞いたけど、大分好評だったぞ」

へんじがない。ただのなつきちのようだ。

二の矢を放つも、またしてもスルー。

……あれ、もしかして怒ってる？

「夏希髪降ろしてるのか。やっぱりいつもの髪形も良いけど、降ろしてるのもいいよな」

三度目の無視。もう止めて、もうPのライフはゼロよ。

「お、おーい。李衣菜ー、夏樹ー？」

「……………Pさん。アンタ、アタシと約束したよな。ライブ見に来るって」

「え、ああ。うん。した………しました」

「アンタが忙しいのは知ってるよ。でもさ、今日は最終日だから、きつとPさんも来るって、だりーの気合、凄かったんだぜ？ 音もさ」

ふええ、圧力が凄いよお。

十八歳の小娘に俺が臆しているだと……？ 悔しいっ、でも感じません。

「あ、やー、一応来たには来たんだぞ？ そのアンコール際にぎりぎりだったけど」

咄嗟に嘘をつく。なんか状況を悪化させそうな気がしないでもない。

タオルを頭にかぶっていた李衣菜が、顔をあげる。あ、ガチで怒っ

てる。

「嘘ですよPさん。私、会場しつかり確認しましたから」

「い、いや。観客は三千人近くいるんだぞ？ 見逃したんじゃないか？」

「う・そ、ですよね」

「……………ふあい」

「なんでそんな嘘つくんですか？」

「あーいやその……ロックかなーって」

「全然ロックじゃないです」

おかしい。李衣菜がちよろくない。

空気が、重い。小梅と一緒に題名が付いてないホラービデオを見た時くらい重たい。七日経ちテレビから女が出てきたときはマジで死を覚悟した。

控室の扉が音を出す。すわ、救世主かつ、と振り返るが、スタッフは何かを察したようで、無言で後ずさり部屋を出て行く。

「と、取りあえず、二人ともステージ衣装から着替えようか。その恰好じゃ風邪ひくぞ。じゃ、俺挨拶回りしてくるから」

Pはにげだした

しかし まわりこまれてしまった！

「これ、さつき更新されたきらりのインスタなんですけど。どういうことですか。私てつきり仕事で来れなくなったと思ってたんですけど」

李衣菜の携帯画面には楽しそうに笑う三人のアイドル。げ、説明文にプロデューサーと一緒に油茶って書いてやがる。

「あー……………悪かった。言い訳にしかないけど、あの店でトラブルが起きてさ。まあ、それでも、ライブに来れなかったのはごめん」
「私、今日こそPさんが来ると思って、魂込めて歌ったんです。私たちの音。Pさんには届かなかったんですね」

李衣菜が悲しそうに顔を俯かせる。くっ、なんて馬鹿だったんだ。ここのところ色々あつて集中できなかつたとはいえ、自分の時間も調整できずにアイドルを傷つけてしまうとは。プロデューサー失格だ。

「……すまん。埋め合わせは、俺にできることなら、なんだってやるから」

「え、今なんでもやるって言いました?」

「え?」

「え?」

「あ、ああ。確かに言ったけど」

すると、李衣菜はタオルを投げ捨て飛び跳ねた。え、なにこの反応。可愛いけど、Pちゃん空気の高低差に付いてけてないよ?」

「絶対ですよ? 言質取りましたからねっ」

「あ、うん」

「イエーイ! 計画通りにいったねなつきち! ひゃーっ、ドキドキした」

「え……お前らまさか」

夏希はにやりと笑う。ヤダ……格好いい……!」

「ああ、一芝居打たせてもらった。でもPさんが悪いんだぜ? アタシたちのライブより、他のアイドルを優先したんだからさ」

「はあ……そういうの止めろよな。心臓に悪い」

力が抜けて、その場にしゃがみこむ。本気で二人は怒っているように見えた。こいつら、こんなに演技が得意だったか? もっとその方面に売り込んでもいいかもしれん。

「へへっ、一足先にドッキリ成功です」

「え? 今なんて?」

「——そんなことよりPさん。挨拶回りはいいのか?」

食い気味に夏樹が聞いてくる。一応主要な関係者には挨拶を済ませているが、全員ではなかった。

「うん、じゃあ俺挨拶してくるから、それまでに着替えておけよ?」

「うひよー、どうしようかなー。久しぶりに温泉もいいなー」

李衣菜の口から恐ろしい言葉が飛び出す。

「あの、李衣菜さん? できれば、複数日掛かるようなお願いは止めていただけると……」

「えー! Pさん、一度言った言葉を曲げるなんてロツクじゃないで

すよ」

「そうだぜ。もうしつかりと録音してあるしな」

携帯電話すつと掲げる。そこからさっきのやり取りが流れる。

万事休す。さようなら……僕のお休み。さようなら……買っただけで一度も開封していないスイッチ。スマブラくらいはやりたかったよ。

「おおっ、どうですかこれ!? 北海道の温泉なんですけど、地獄谷ってロックじゃないですか?」

控室から出ようとする俺の袖を引いて、キラキラした目で見つめてくる。くっ、そんな顔されると憎もうにも憎めない。でも仕返しはしたい。

「李衣奈、お前汗臭いぞ」

「なっ、ア、アイドルに向かってなんて事言うんですか!」

仕返し終了。本音を言うと、かなり良い匂いでした。